

藤堂高虎の城下町建設にみる 織豊期城下町プランの受容と展開

中西和子

- I. はじめに
- II. 秀吉の城下町「秀吉モデル」
- (1) 信長から秀吉へ—都市プラン変容前史—
 - (2) 長浜の城下町プラン
 - (3) 豊臣家本城としての大坂
 1. 第一期大坂 (1583~1595年)
 2. 第二期大坂 (1596~1614年)
 - (4) 小結—「秀吉モデル」の変容—
- III. 藤堂高虎の城下町プラン
- (1) 藤堂高虎の城下町建設前史と人脈
 - (2) 今治
 1. 今治の城下町プラン
 2. 寺院配置の意義
 - (3) 伊賀上野
 1. 伊賀上野の城下町プラン
 2. 寺院配置の意義
 - (4) 「高虎モデル」の変容
- IV. まとめにかえて
- (1) 「高虎モデル」にみる「秀吉モデル」の影響
 - (2) 今後の課題

I. はじめに

戦後、歴史地理学や史学が研究課題としてきたものは、地域構造なり空間構造であり、歴史法則であった。それゆえに、地域の空間構造あるいは歴史を作り上げる主体であった人物に焦点をあてた歴史的アプローチには十分な評価が与えられなかった。その背景には、人物重視の歴史的な研究は、ややもすれば英雄

史観・個人崇拜へとつながる危険を孕み、歴史のアマチュアリズムに墮するという危惧が、実証史学、あるいは社会の法則性を前提とした唯物史観にはあつたからにはほかならない。かつて矢守一彦が「人間不在の地理学」を嘆いたが¹⁾、その後の歴史地理はそれに対する十分な答えを用意しただろうか。

近世史の舞台であった城下町の研究に関しては、従来の歴史地理研究は、地形図および絵図を用いた城下町復元、モデル化において大きな成果をあげた。しかし、その大部分が単独の城下町を対象にした研究であるため、復元および同一城下町内での時代的変容が精密に追跡されていながらも、都市群としての城下町がどのような変化・発展を遂げたか、全体として見通すまでには至っていない。

一方、複数の城下町を対象とした研究に、歴史地理学におけるひとつの到達点ともいえる矢守による二つの空間構造の類型がある。一つは城下町全体のプランに関わる類型²⁾で、城下町の囲郭に注目してそのプランを時系列的に、戦国期型・総郭型・内町外町型・郭内専士型・開放型の五つに類型化するものである。もう一つは町人地と城郭の向きに関わる類型³⁾で、城からの大手と主要な町通りの位置関係により縦町型(以下、タテ町型)と横町型(以下、ヨコ町型)の二つに類型化したものである。これらの分類は、歴史地理における城下町研究の基本となり、先の個別城下町研究は、程度の差こそあれ、この類型論を援用している。

しかし、宮本雅明は内町外町型が、当初からの城下町プランの類型として時系列的に現れたということに否定的であり、城下町の計画当初のプランを復元する必要性を指摘する⁴⁾。

それに対し金井年は、矢守の五つの類型が、織豊期以降の城下町の主要な構成要素である寺町に言及していないことを指摘した⁵⁾。そのうえで氏は寺町を「ガードライン」⁶⁾と規定し、その形成に領主の寺院統制の完成度が反映されているとの卓見を示した。すなわち、明確な寺町を持たない内町外町型を寺院統制の不徹底な中世的色彩を帯びたプランととらえ、逆に、寺町を城下町の囲郭として積極的に利用する郭内専士型をより新しいプランであることを指摘した。これは一見、従来の矢守類型の改良型であるかのようにみえる。しかし矢守が、郭内専士型として完成された城下町において、外延的成長をとげて新たに成立する非地子免除である町場を含めて外町とよんでいることも勘案すれば、時系列の中で捉えた、かの類型を根本から覆す可能性を含んだ指摘でもある。

以上から、城下町プランの類型に関する時代性をふまえた研究は、さらなる見直しを進める必要があることがわかる。そのためにはまず、城下町プランのなかでも建設当初のプランを復元した原初の基本プランを把握したうえで、類型をおこなうのが妥当であろう。

既往の研究において、城下町設計者に注目した研究は非常に少ない。城下町の建設にあたっては個々の大名がまったくオリジナルなプランを創出したのではなく、何か参考とすべき具体的な城下町がその念頭に存在していたと考えるのが自然であろう。したがって、城下町プランそのものの時系列変化を追跡することや、基本プランの抽出を目的とするのであれば、ある程度、同一の基盤を持ったグループ(大名群)もしくは個人(大名)を調査・研究の対象とするのが有効であると思われる。

それには、①ある程度の期間を通じて複数の城下町を設計し、②なおかつそれらの初期の形態が内部の建築物や課税体系のような支配体制までふくめて復元可能であること、このふたつの条件をみたす築城者を選択する必要があると考えられる。

本研究では、以上のことを踏まえてまず、豊臣秀吉と藤堂高虎が建設した城下町を事例とし、織豊期の城下町プランの基本型と、それが近世的変容をとげる過程およびその要因となるものについて探っていきたい。その際に、中世からの既存の勢力に対する築城者のありかた、城下町プランにおける寺(社)の果たした役割、および町人地の地子免地・年貢地の違いまで視点にふくめてアプローチを試みたい。

II. 秀吉の城下町「秀吉モデル」

(1) 信長から秀吉へ—都市プラン変容前史—
戦鬪に明け暮れながら全国統一の前提を作った織田信長は、各地において関所の撤廃や楽市・楽座令などで商業の興隆を図った。とりわけ、安土城の建設に際しては、中世以来の湖岸の港町であった常楽寺はもともと町場の要素を備え、商業的機能を有していた。さらにその地が、信長によって城下に取り込まれ、安土城下町の一部に再編されていく過程は小島によって解明されている⁷⁾(図1)。

また、信長の一連の政策の根底を貫くものは、強烈な中世遺風の否定であったことが窺えるが、その一方で、町割りというフィジカルな構造にほとんど関心を示さなかったのか、図からもうかがえるように次世代の秀吉のような整然とした町づくりは行わなかった。ブロックによって方位が異なる不規則な町割に関して、小島は、城下町建設より以前から同地に存在していた常楽寺(港)・慈恩寺を中心とした町場に信長が手を付けられなかったからだと推定した。



図1 安土城下と中世起源町場 小島道裕 (1990) を一部改変

(2) 長浜の城下町プラン

信長とは対照的に、秀吉は寺院に代表される中世来の既存権力を積極的に利用した都市経営を行った。伊藤毅が指摘したように、都市計画の中に中世的先行基盤を巧みに継承していくのが秀吉の基本姿勢であった⁸⁾。以下では、秀吉自身が建設した最初の城下町である長浜、信長の後継者としての豊臣家の本城である大坂を対象に、秀吉の城下町における基本プランについて考察する⁹⁾。

天正元年(1573)浅井氏滅亡後、織田家の近江支配の拠点として、秀吉がはじめて浅井の旧領である湖北三郡12万石を一円知行することになった。翌2年の春ごろより、内陸の山城である小谷城から、「今浜」を「長浜」と名を改めて、琵琶湖岸の平野部に居城を移すとともに城下町の建設にも着手する。この地には、規模・縄張りは不明ながら、延元元年(1336)に佐々木導誉によって築かれた今浜

城があり、その重臣の上坂氏が入っていたことが知られており、中世来の重要拠点であったことがうかがえる¹⁰⁾。

長浜城は天正10年、秀吉が去った後、柴田氏、次いで天正12年に山内氏(5000石)が入るが、同18年の掛川転封後、石田三成の佐和山入城にともない湖北支配の中心は長浜から佐和山へと移る。その後、慶長11年(1606)に内藤氏(4万石)が入部するが、元和元年(1615)に高槻転封の後には廃城となる¹¹⁾。その結果として、秀吉の城下町建設以後、都市的発展の契機となる出来事はなかったため、湖岸の城郭部はさておき、秀吉による当初のプランはほとんど変化がなかったと思われる。

長浜の城下町(図2)から、町割のプランに城下全体に一貫した規格性は認められないが、街路のパターンは基本的には同一間隔・同一方位を志向したことがよみとれる。いずれも直線的で直交する街路が基本になっており、

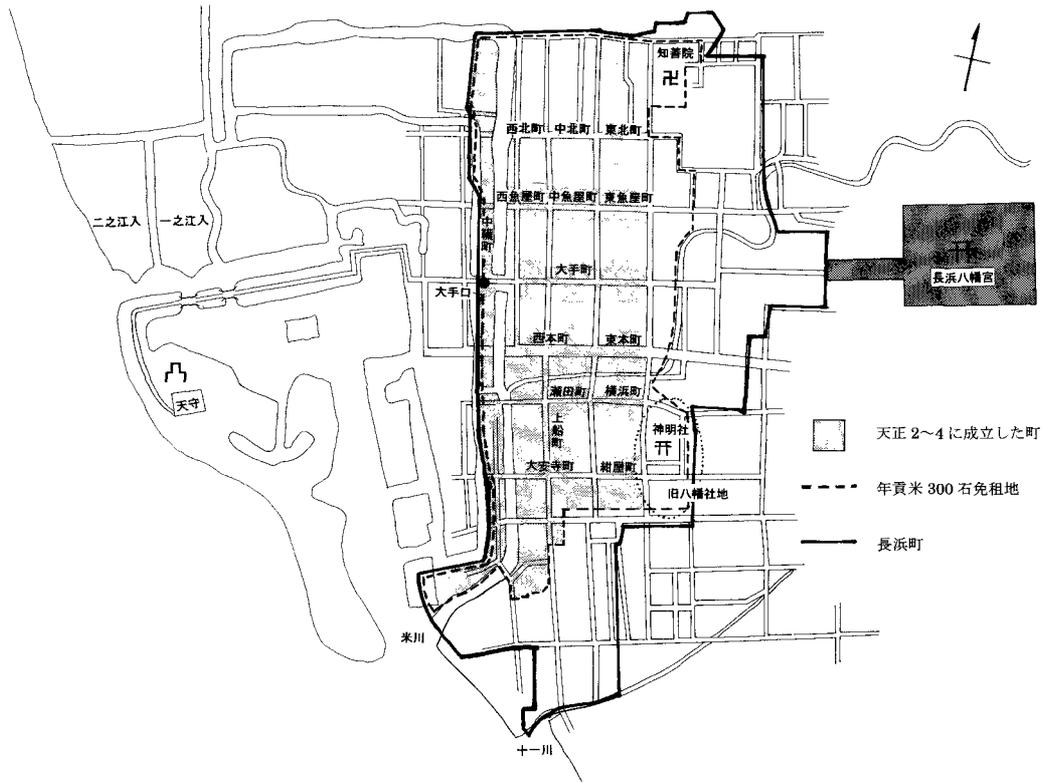


図2 長浜城下町

市立長浜城歴史博物館編『湖北・長浜と秀吉』，1996，14-15頁所収を一部改変
注) 文字の向きは町の向きを表している

いわゆる遠見遮断になったところがほとんどない。なお、町屋部分の街路は基本的に同一方位(E15°N)およびこれに直交するパターンを志向していることがよみとれる。

町の向きについては、かつて北国街道を中心にしたヨコ町型ととらえられたこともあったが、足利健亮によって、大手町とそれに平行する本町・魚屋町が上位の街路であるタテ町型であることが明らかにされた¹²⁾。長浜の城下町は、第一期(1574-76)・第二期(1577-80)・第三期(1581)の三段階にわたって整備されたことが森岡栄一によって明らかにされており¹³⁾、図1の網掛部分の町並が示すように、第一期の大手町・本町・魚屋町・北町・瀬田町・横浜町・大安寺町・紺屋町はすべてタテ町を構成しており、一部南端の船町のみがタテ・ヨコ両方に間口を開く。

それと対照的に、第二・三期に整備された小谷から移転してきた町はすべてヨコ町である。最終的には大手・およびそれに並行するタテ・ヨコともに町通りを形成するタテ町ヨコ町型になるが、建設当初は完全なタテ優位であった。

それに加えて、秀吉に特徴的な「寺社に代表される中世的先行基盤にむけて町を建設する」手法が、すでに長浜で試みられていることは注目に値する。その根拠として、城から大手の延長上に長浜八幡宮があるが、八幡宮の元宮といわれる「神明社」の存在により、本来の社地は八幡町一帯であったことを強調しておきたい。この社に対し、秀吉は城下建設に先立つ天正2年(1574)2月20日付で、現在地に移転する補償として160石を寄進し、あわせて新社地の地子を免じて、社殿を新築

するという優遇策を採用している¹⁴⁾。

この八幡宮の天正期以前おける境内の位置や規模は不明ながらも、湖岸の長浜城の付近で大きな社地を有し、湖北の信仰の一つの中心として機能していた¹⁵⁾。復元プランからみて、長浜城下町の建設に際し、移転をとまなうものではあったが、八幡宮にむかって町づくりが計画されたことは疑いないであろう。長浜城下町建設時にすでに、後の大坂城下にもみられる城→大手→寺社という城下の方向性と、タテ町型という基本の様式が完成されているとみるべきであると考えらる。

また、城下町プランのようにフィジカルな問題ではないが、秀吉が長浜在城当時に、城下町の住人に地子と諸役の免除を与えていたことをあげておきたい¹⁶⁾。しかし、後に領内の百姓が城下に移住して年貢の徴収を逃れようとしたため、この措置を一時停止しようとした。結局、天正19年(1591)の長浜町人宛ての文書でこれらの免除は継続されるが、城下の地子免除を発給した領主にとって、農民の城下流入と、それを阻止するための城下町域の確定は、重要な問題であったことがわかる。

(3) 豊臣家本城としての大坂

秀吉による大坂の都市開発は、既往の研究によれば次の二期にわけられる¹⁷⁾。

1. 第一期大坂(1583～1595年)

天正11年(1583)6月2日、信長の一周忌の法要を主催し名実ともに信長の後継者となった秀吉は、石山本願寺の旧寺地に大坂城を築く。築城に先立ち、8月に石材の確保と運搬のための道普請を命じている。9月から築城が開始され、同時に城下町づくりも始められた。第一期では上町台地上が開発され、この時の城下町の範囲は、上町・玉造一帯と台地の向きに沿う南の平野町が中心であった。

なお、この時点における秀吉の構想では最も主要な町として、平野町が位置付けられていたと考えられる。内田九州男は、築城開始

からわずか3ヵ月ですでに平野町に町屋が建設され、かつ平野町の伸進する南の方角には四天王寺があり、その南には大坂の外港として堺があることを指摘している。さらに従来では、元和年間に建設されたと考えられていた大坂の寺町は、この時期にすでに秀吉のプランの中に組み込まれていたことを明らかにした¹⁸⁾。伊藤はこれを、秀吉によって、旧石山本願寺と四天王寺という中世からの二つの「点」が、平野町という「線」状の町によって結ばれて、新しい都市構想が完成されたと評価した¹⁹⁾。

町割は、上野町・平野町ともに東西60間・南北20～30間が基本となっている。また佐久間貴志によって、発掘調査の成果から、この時点の大坂は南北の街路がマチ通りを構成していたことが明らかにされた²⁰⁾。当時の大坂城の大手は不明であるが、上本町一平野町のラインが最優位の町であることは明らかなので、これを大手とみなせば、完全なタテ町型のプランと読むことができる。すなわち、第一期大坂は、北から南へ向かい、城→大手→四天王寺→堺という、寺院を経由する明確な方向性を持った城下町であったことになる。

2. 第二期大坂(1596～1614年)

慶長元年(1596)の大地震によって大きな被害を受けた堺に代わって大坂での港湾開発が進展した。さらに、慶長3年以降、大坂城三の丸建設のため移転させられた町屋をも吸収して、大坂城下町はその範囲を西に広げる。台地上の上町に対し、下町とよばれる難波砂堆上、現在の船場地区の東部が開発される。ここで町の成長方向が南向きから西向きに変わり、町通りは東西軸に変化して、タテ町型のプランを構成する。

秀吉の死後もこの事業は継続するため、どこまでが秀吉の構想かは不明であるが、船場の開発は第一期からの構想に連動していることは間違いないであろう。

しかし、町割は東西・南北ともに40間の正

確な基盤目割になり、上町の短冊状町割とは著しく異なる。この町割は多分に京都を意識したと考えられ、慶長3年の「町中屋敷替」によって移転させられた津村御堂(北御堂)・難波御堂(南御堂)の配置も同様の推測が可能である。本町を基準にした、平安京の東寺・西寺に擬せられる。

以上の点から、第二期大坂においても東から西へ、城→大手→寺院(北御堂・南御堂)→木津(港湾)という寺院を経由する方向性の再現が指摘できる。

(4) 小結—「秀吉モデル」の変容—

これまで検討してきた個別事例を総括する意味で図3を作成した。秀吉は長浜において城郭と八幡宮の間に町をつくり、第一期大坂では上町台地上の旧石山本願寺と四天王寺という二つの歴史的核の間に町づくりが計画された。また、第二期大坂では、あたかも平安京において朱雀大路を挟んで東寺と西寺が並び合う形を大坂において再現したような、北御堂、南御堂が大手である本町を挟んで並び合う寺院配置を考えた。

長浜では、寺院を一箇所に集積する寺町は採用されなかったが、すでに城下建設時に寺社を一部移転させながら城下町の全体プランのなかで必要に応じて配置しなおすという、後の大坂に続く手法が確認できる。信長のように中世の既存勢力=寺社を否定するのではなく、秀吉は寺院に代表される中世来の既存勢力を積極的に利用した都市経営を行った。寺院を一カ所に集積するタイプの「寺町」を建設すると同時に、一部を残して自らの町割プランを整合させていくのが秀吉の都市づくりの特徴であるといえるだろう。また、寺院の土地開発力を期待した上で、積極的に利用したともいえるであろう。その傍証として、大坂の場合、本願寺に天満を与えたが、開発が一段落した後は再び京都に移転させている事例があげられる。城下で、開発に困難を

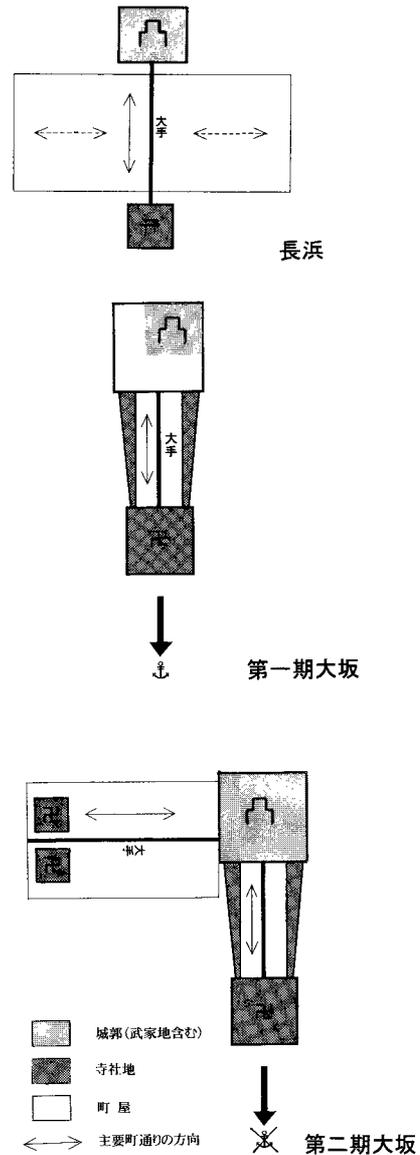


図3 秀吉の城下モデル

ともなう地所を寺院に与えるとなると、基本的にその場所は縁辺部に位置することが多くなる。

ともあれ、このように前代以前の寺社をプランの中に取り入れた斉整的な都市は、外縁部に位置する中世的基盤の象徴である寺社に向かう明確なベクトルを持ち、そこに城下町の中心である城郭を頂点とした一種のヒエラルキーが具現化される。その上に、自らが裁

定した現世秩序に基く居住形態を作りあげたのが秀吉であり、この理念を最もよく反映したのがタテ町型の城下町であった。

Ⅲ. 藤堂高虎の城下町プラン

(1) 藤堂高虎の城下町建設前史と人脈

織豊期から徳川による幕藩体制が確立していく時期に、築城の名手として数多くの城下町創設に携わることになる藤堂高虎(1556-1630)が、城郭のみならず城下の町割りにも異才を示したことは、従来あまり知られていない。殊に今治築城を画期として、従来になかった特異な城郭と町割りでその名を不動のものとし、後の徳川による天下普請では歴然とした外様大名でありながら、単なる「お手伝い普請」として経済的負担を分担するだけでなく、実質的な城下町の設計者として活躍する。

本章では、高虎という人物を通して、先にみた秀吉の城下町建設の基本プランと手法がいかにか受容されて、また独自の展開を遂げているかを抽出する。それは元来農村居住者であった武士を城下に集住させ、「市」を城下に取り込みながら商業機能を発達させ、家臣団が居住する「居館」を新しい都市として整備していく<近世的変革>の地方的拡散の表象として、高虎の城下町づくりを考察することである。その対象として、彼が直接関わったことが判明しており、当時の都市プランの原形を今もよくとどめ、自らも領主として居住した今治と伊賀上野を中心にとりあげる。

考察の前に、藤堂高虎の今治入城以前の経歴を藤堂家の正史である『宗国史』²¹⁾および『高山公実録』²²⁾から抽出することで、信長から秀吉へと変化しつつも継承される城下町プランとの接点を探ってみる(表1参照)。

藤堂高虎は弘治2年(1556)近江国犬上郡在土村(現在の甲良町)に生まれる。後の藤堂家は藤原氏を称するが、『宗国史』によれば在土村の旧名は藤堂村とも称したとあるように、

平時は農村に住み、合戦時には「陣借」というかたちで雇用される郷士の出身である。湖北の戦国大名浅井氏との縁が深く、元龜元年(1570)の織田家との戦いにおいては小谷城を守って戦うが、3年には小谷城を去り、翌天正元年の小谷城落城・浅井家の滅亡には立ち会ってはいない。

その後、天正4年(1576)近江長浜において秀吉の異父弟・羽柴秀長(1541-91)に300石で仕え、秀吉の陪臣になる。当時の、秀長の知行高は不明であるが、兄・秀吉の知行がおおよそ12万石であることを考えれば陪臣である高虎の石高はかなりの高禄であり、秀長の家臣として上位にランクされたといえよう。また時期は、秀吉が小谷から長浜へ居城を移した時期にあたり、高虎は建設の進む長浜城下を目の当たりにする。近年発見された前野家文書『武巧夜話』には、天正2年6月のこととして長浜の御城御普請方奉行および係の名が記されており、その中に藤堂与右衛門(高虎)の名も見える²³⁾。

さらにもう一点、近江時代は、高虎の人的ネットワークの形成からも重要である。普請の分野では石垣技術の穴太衆・庭園技術者として名高い小堀遠州、作事の分野では安土城天守閣建築の建仁寺大工棟梁の甲良光広ら、高虎と同じ近江出身の技術者集団との接触があった。また、後に秀長の大和国移封により、後に大坂城・江戸城の天守閣を設計した法隆寺大工の棟梁中井正清とも親交を持つ。いわば、高虎は秀長に仕えることで、後世「築城の名手」と称されるのに必要不可欠な技術・人脈を得たことが推測される。

家康と直接の交渉を持つ契機となったのは、天正14年の家康入京に際して、秀吉が家康の伏見の邸造営奉行に高虎を任じたことであった²⁴⁾。その後も秀長に随い、幾多の戦歴を重ね、秀長の死後は家老として秀保の後見にあたる。文禄4年(1595)、文禄の役参戦中に、秀保が夭折すると、大和豊臣家の断絶に抗議

表1 藤堂高虎年譜

年号	西暦	年齢	石高	出来事	天下普請
弘治2	1556	1		近江国犬上郡在土村に藤堂虎高の次男として出生	
元亀元	1570	15		姉川の合戦、小谷城に入る。長政より佩刀を賜う	
3	1572	17		浅井家を去り、諸国を流浪	
天正元	1573	18	80(石)	浅井家滅亡。磯野員昌に仕える	
4	1576	21	300	長浜で羽柴秀長に仕える。名を高虎と改める	
9	1581	26	3300	秀長に従い但馬へ。一色氏の久芳夫人と結婚	
10	1582	27		本能寺の変	
11	1583	28	4600	賤ヶ岳合戦で1300石加増	
13	1585	30	1万	秀長に従い、大和郡山城築城。5400石加増。 紀州粉河城主になる	
14	1586	31		家康の伏見邸を造営	
15	1587	32	2万	1万石加増	
16	1588	33		秀吉の命により長崎へ。粉河に常行寺建立	
文禄元	1592	37		文禄の役。朝鮮へ渡る	
4	1595	40	7万	秀保死す。高虎、高野山に入る。板島7万石に国替え、 宇和島と改める	
慶長元	1596	41		宇和島築城はじめる。慶長の役はじまる	
2	1597	42		朝鮮へ渡る	
4	1599	44	8.3万	帰国に際し、弟正高を家康に人質に出す(※忠勤録)。 家康より下総香取郡に3000石	
5	1600	45	20.3万	関ヶ原の戦い。東軍に参加。戦功により12万石加増、 伊予半国を領有する。今治を新しい居城に	
6	1601	46			膳所城を縄張・ 普請奉行
7	1602	47		今治築城	伏見城修築
11	1606	51	22.3万	備中国内に2万石加増	江戸城改修
14	1609	54		駿府に邸を造営	丹波笹山城築城、 丹波亀山城築城
16	1611	56		津城・伊賀上野城築城	
18	1613	58			御所の修築
19	1614	59		大坂冬の陣	江戸城修築
元和元	1615	60	27.3万	大坂夏の陣。戦功により5万石加増	
2	1616	61		家康死す。日光の墓所の縄張・造営	

して高野山に入山するが、同年七月に秀吉に宇和島7万石を与えられ下山し、この時点で初めて高虎は諸侯に列することとなる。翌慶長元年(1596)「八月板島城(宇和島城)ヲ修ス」²⁵⁾とあるように、城の建設に着手するが4か月後には再び慶長の役で朝鮮に渡り、慶長4年7月に帰城するまでほとんど宇和島にいたことはなかった。しかも同年、「冬十月十八日 白雲公(父・虎高)板島ニ卒ス」²⁶⁾以外に、慶長5年「春正月板島城ヲ修ス」²⁷⁾まで、『宗国史』・『高山公実録』ともに宇和島の城・城下町に関する記述はない。慶長5年も6月にはすでに、関ヶ原の合戦に先立つ上杉攻めに出征し、城下の整備は中断された

ままほとんど進まなかったとみるべきであろう。

(2) 今治

1. 今治の城下町プラン

今治平野は高縄半島の東部に位置し、蒼社川が形成した沖積平野である。古代には伊予国府がおかれ、南部に条里地割が現存している。

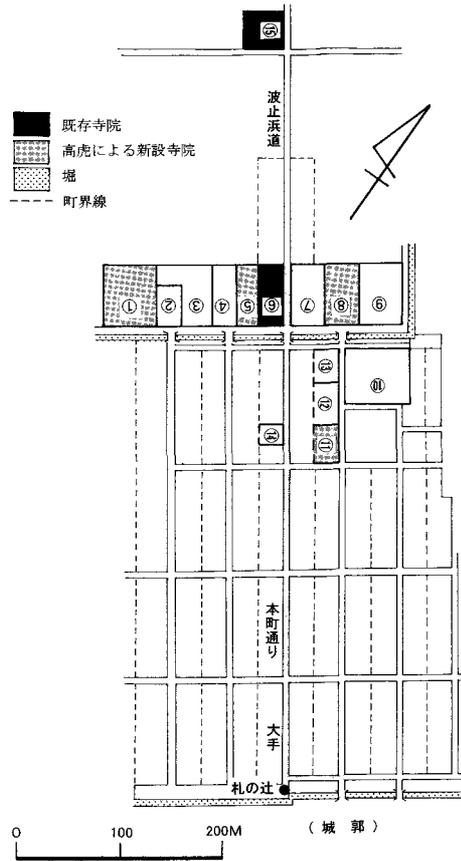
慶長5年(1600)、藤堂高虎は伊予(半国)20万石の国持大名となり、宇和島から今治に居城を移す。蒼社川左岸の今治平野中央部を城下町経営の地に選定し、当時「小田の長浜」とよばれていた地を「今治」と改め、築城奉



図4 今治周辺と今治城下町復元図

明治22年測量地形図および『享保元年今治町絵図』（今治市所蔵）に記載の寺院を地形図にプロットして作成

注）寺院番号は表2に対応，および数字の向きは寺院の正面をあらわす。



行に渡辺勘兵衛，普請奉行に木山六之丞²⁸⁾を任じて，慶長7年6月から築城工事を開始する。城下の町割は翌慶長8年2月に開始する。その後，慶長13年高虎が伊賀・伊勢に国替えになるまで藤堂藩20万石(のちに22万石)の領国の首都として繁栄する。

高虎の転封後は養子の高吉が2万石で今治を知行するが，寛永12年(1635)隣国の松山藩より松平貞房が分家して今治藩3万石を知行し，最終的に知行高は5000石増加して最終的には3.5万石で明治維新をむかえるため，当初の高虎のプランが大きく改変されることなくそのまま保持されたと考えられる。

また，今治は，高虎自らが本格的にプランニングし完成をみた最初の城下町であり，城・武家地と町屋部分が明確に分離され，規格性に富んでいるのが特徴的である(図4)。

城郭部分は一辺の長さが約50間四方の正方形で，堀の水源地は海水で，わが国の築城史上初の海浜立地の平城で，武家地と町屋を隔てる外堀をふくめ三重の堀に囲まれている。

町屋部分は「今治八町，四町四方」とも称されるが，そのうち高虎によって創設されたのは本町を中心に西に米屋町・室屋町，東に風早町・中浜町の五町であるとみられ，これは『宗国史』の記述とも一致する²⁹⁾。各町とも一丁目から四丁目まであり，両側町を構成し，一丁の長さはすべて60間，通りに面して奥行きはすべて15間と，非常に規格性が高い。

さらに，城およびそれに付随する堀，および町屋部分の通りすべてが同一方位(N32°E)で，筋である街路もすべて通りに直行している点があげられる。後の松平時代にできたと思われる片原町の浜側を除いて，すべて

表2 『享保元年今治町絵図』にみる寺院

所在	寺名	宗派	創建年代	備考
寺町	①来迎寺	浄土宗	不詳	高虎が国分山より移す 高吉の代66万石
	②光林寺	不明	不明	現存せず
	③大雄寺	曹洞宗	1608(慶長13)	高吉が越知郡五川町より移す
	④隆慶寺	曹洞宗	転入	大庵須同益開山(16C)
	⑤円光寺	曹洞宗	高虎築城時	
	⑥円浄寺	浄土宗	1594(文禄3)	
	⑦大泉寺	曹洞宗	不詳	元文年間(1741~1747)頃か?
	⑧西蓮寺	浄土宗	1600(慶長5)	高虎が近見伊賀山より移す
	⑨法華寺	日蓮宗	1697(元禄8)	今治新町より転入
町内	⑩松源院	浄土宗	1656(明暦2)	今治藩菩提寺(松平)として創建一明治で廃寺
	⑪常光寺	浄土真宗	1603(慶長8)	高虎による
	⑫万勝寺(幡勝寺)	浄土真宗	1661?(寛文初)	
	⑬正法寺	浄土宗	1688(元禄元)	室屋町より転入
	⑭称名寺	浄土真宗	1643(寛永20)	
	⑮神供寺理性院	真言宗	1572(元亀3)	快賢上人開山

(聞き取りを元に作成、網掛け部分は既存が確認される寺院)

の町が一丁60間、奥行き15×2の30間に統一されており、街路のパターンに遠見遮断のための食い違いが一切みられない。城下建設当初の宅地割を示す絵図は現存しないが、元禄12年(1669)の『今治各町間寸改帳』³⁰⁾からみる限り、今治は、大手である本町が中心の、純然たるタテ町型の城下として設計されたと考えられる。しかし、幅4間の堀の外側、北西部の寺院地区は大手に直行する寺町通りに間口を開いている。

以上の点から、今治はプランのうえでは秀吉が創設した長浜に類似した、本町通り=大手通りを文字通り中心にしたタテ町型の均整的な性格の強い町であったといえる。

2. 寺院配置の意義

次に、基本のプランのなかで個別寺院がどのような順序で配置されたかを見るために各寺院の開基年代および移転の時期を調べた(表2)。その結果、本町通りに接する円浄寺は、城下建設以前から現在地に存在し、寺伝によれば、文禄3年(1594)土岐政経の発願により建立された浄土宗寺院で、創建以来移転していないことがわかった。

一方、来迎寺・隆慶寺・円光寺・西蓮寺は、高虎が城下周辺から移転させたものである。同時に、風早町4丁目に常高寺が建立される

が、寺伝によると、もと秀吉の家臣加藤常高が高虎に寺地を与えられ、自らの俗名を寺名にしたもので、唯一、高虎が町屋内部に立地させた寺院である。他の寺と異なり、領主と住職の間に個人的つながりあった一種特権的な寺院と考えられる。それに加え、城下の外になるため絵図には描かれませんが、城下から大手(=本町通り・波止浜道)を延長した街路沿いの、元亀3年(1572)開基の神供寺理性院の存在も注目すべきであろう。

以上より、高虎の城下建設を機に、今治の寺院は既存寺院である円浄寺・神宮寺理性院と、新設寺院である来迎寺・隆慶寺・円光寺・西蓮寺の2つのグループに分類ができる。

まず、既存寺院の円浄寺は本町通りによって寺地が限られ、大手通りでもあるこの通りはタテ町タイプの今治の中心基準線になっている。これは、城下建設に先行して、海浜の砂堆上に城下予定地の外から続く直線的な波止浜道があり、その道沿いに円浄寺・神宮寺理性院が立地していたが、高虎はそれを大手通りとして採用し町割の基準線としたと考えられる。したがって、今治城下のすべての街路の方向を規定するN32°Eの傾きの由来は、先行する砂堆上の旧道に求められる。そして旧来の寺院(もしくは神社)と城郭の間に城下

町を建設するのは、秀吉の常套手段でもあった。そこには、長浜と同じく城→大手→寺社(円浄寺)という図式を読み取ることができる。

一方、新設寺院で構成された寺町は、砂堆にクロスするかたちで場末に立地している。高虎時代から今治が地子免であった史料は確認されていないが、後の伊賀上野・津と同様に、初期の今治も同様であった可能性が高い。そうであれば、この寺院列は地子免地と城下外の年貢地とを分ける機能を持っていたと考えられる。なぜならば、図4にみるように、町の北東は海であり、南東は城郭であるため市域が無秩序に拡大することは物理的に不可能である。さらに南西側は、地籍図に、「濱田」・「ヤコボシ」という小字名が見られること、今治市水道局のボーリングデータから粘土層が確認できること、正保城絵図でこの方面のみ「浅田」の表記がみられないこと、享保年間の『今治村分限絵図』（今治市所蔵）に室屋町と今治村の境界線に「洪水対策」の意が標記された藪床が描かれているなどの理由から、居住に適さない低湿地であったと推定される。唯一、町が広がる可能性があるのが北西の方角、つまり海岸に沿う砂堆の伸びる方向であった。

(3) 伊賀上野

1. 伊賀上野の城下町プラン

城下町伊賀上野は、上野盆地の中央に突出した、阿閉山・上野山とも呼ばれた洪積台地上に立地する。それより低位面の沖積地は古代より開発され、印代付近は広く条里地割が残り、伊賀国府に比定されている。天正13年(1585)、秀吉により筒井貞次が移封され、台地上の平楽寺跡に城を築いた。家臣団の屋敷は台地下の小田町付近にあったとされるが不詳である。

慶長13年(1608)、改易された筒井貞次のあと伊賀・伊勢(安濃郡・一志郡)22.3万石の大名となった藤堂高虎が上野に入部する。

「大阪表非利においてハ、大御所公ハ上野の城へ引取り、大樹公秀忠公ハ江州彦根城に入らせ給ひ防へし」³¹⁾と、大坂での戦いに備えて、家康自らが高虎に命じて築かせた城下町であった。

しかし、高虎は、翌慶長14年に丹波篠山城、さらに慶長15年には丹波亀山城と続けて天下普請に参加するため、伊賀上野と津の改修は転封から3年後慶長16年に始まった。伊賀・伊勢と二カ所同時の築城となるが、「津は平時の城」として、「以上野為根本」³²⁾の考えのもと伊賀上野が重点的に整備された。

伊賀上野は高虎によって、それまでの豊臣方の城から逆に豊臣を攻めるための城へと性格を変えられた。同時に筒井時代は北に向いていた城が、南向きに変えられ、城下町も上野台地の上に建設された。いわば城下町全体が筒井時代と反対方向を指向することになった。最悪の場合、戦場になることも想定されたため、城郭部の縄張には細心の注意が払われ、旧筒井時代の本丸の西側を削平して城地を拡張し、そこを新たな本丸とした。さらに内・外堀とも深く掘込み、西側の石垣は、日本一ともいわれる15間の高さを誇る。城郭部分は防御を意識した改修が施された(図5)。

しかし、城下町の部分はさほど防御を念頭に置いた町づくりがされたとは考えにくい。なぜなら、街路は基本的に直線のかつ直交するためいわゆる遠見遮断が施された様子は確認できず、唯一、天神前の街路が屈曲しているが、これは社地を割り出すためのものであると考えられる。町全体のプランとしては、藤田達生の指摘するように城下町の商業振興をめざしたものであるといえよう³³⁾。台地の西北端部の城郭から外堀(南部分は空堀)の南側に、東西に通る三筋町があり、北から本町・二之町・三之町とよばれ、ヨコ町を構成している。なお、高虎は入部後、伊賀における商業を上野・名張・阿呆に限定した³⁴⁾。上野の商業はこの三筋町のみで許可し、商人を

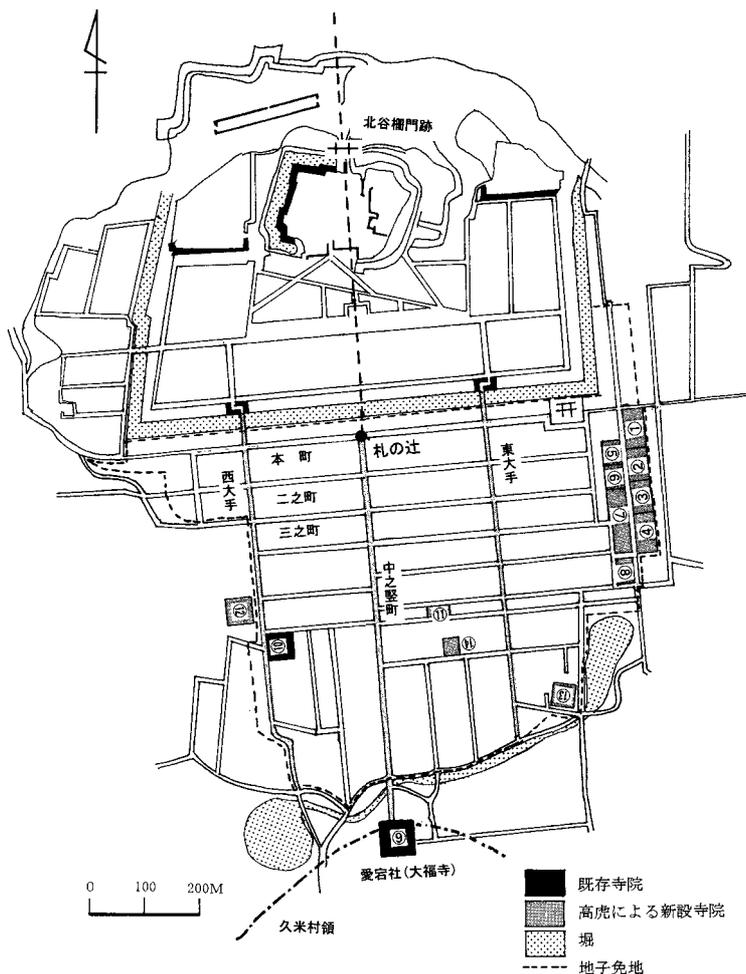


図5 伊賀上野城下町復元図

『元和5年～寛永17年伊賀上野絵図』（上野市図書館所蔵）を地形図にプロットして作成

保護した。さらに三筋町の南に下級武士の居住地をおき、その南の荒地は町人町扱いにして三筋町と同じく、木興池—かご池以北を地子免除の農地兼宅地とした。

伊賀上野の町割プランの特徴として、外堀の南辺および三筋町をはじめとするすべての通りが同一方位(E 7° N)によって規格されている。これは伊賀盆地の条里の方位といわれてきたが³⁵⁾、実際の条里は印代付近でN 4° Eを示し、関連は認められない。また、西大手・東大手の二つの大手があること、そしてその間の中之堅町との間隔がともに 244 mと等しいことが以前より指摘されている³⁶⁾。

ここで指摘しておきたいことは間を単位とした完数になっていないことである。町全体に一定の規格が貫徹していた今治と異なり、先述の三筋町も町ごとの街路の幅員に階層性が認められる。また、関西大学の調査で明らかにされているように、『累世記事』³⁷⁾の記述と、実測の町ごとの奥行が異なる点も注目すべきであろう³⁸⁾。

3. 寺院配置の意義

基本のプランのなかで個別寺院がどのような順序で配置されたかを見るために最も古い伊賀上野絵図といわれる『上野古図』（上野市立図書館蔵：元和5～寛永17）に描かれた

表3 『上野古図』にみる寺院

所在	寺名	宗派	創建年代	備考
寺町	①上行寺	法華宗	高虎築城時	粉河→宇和島→(今治)→上野
	②妙昌寺	法華宗	不明	
	③万福寺	真言宗	不詳	旧平楽寺 城内より移す
	④念仏寺	浄土宗	不詳	高虎による再建 旧寺地不明
	⑤妙典寺	曹洞宗	不詳	
	⑥善福院	真言宗	不明	
	⑦大善寺	浄土宗	高虎築城時	粉河→宇和島→今治→上野
	⑧超誓寺	浄土宗	不明	
町内	⑨大福寺	真言宗	高虎新設	愛宕社(慶長5年)の神宮寺
	⑩西念寺	浄土宗	天正晩年	簡井定次が佐那具より移す
	⑪山溪寺	臨濟宗	1615(元和元)	高虎が大年のため建立
	⑫広禅寺	曹洞宗	1611~1615	渡辺堪兵衛が河北村より移す
	⑬蓮池寺	浄土宗	不明	
	⑭心念寺	浄土宗	1625(寛永2)	

(『伊水温古』および聞き取りを元に作成、網掛け部分は既存が確認される寺院)

各寺院の開基年代および移転の時期を調べてみた(表3)。これをみると、寛永2年(1626)創建の心念寺を別にして、大福寺・西念寺が高虎の城下町建設時における既存寺院である。

この二つの寺は明らかにランドマークとして、伊賀上野の町割決定の際に基準点となったことが読み取れる。特に、町割の中心線となったと考えられる中之立町の延長上に位置する大福寺は、慶長5年(1600)に愛宕神社の神宮寺として建立され、高虎が、元和二年(1616)本地仏である「勝軍地藏」を新請した寺院であることは重要である。図からもわかるように、この社は元来、久米村領のサエキリの神であった³⁹⁾。また、事実上の大手であるこの街路は、2500分の1都市計画図上で、高虎時代本丸の最北部の北谷柵門跡⁴⁰⁾と大福寺を結ぶラインと一致することが確認できる。一方、西念寺は西の大手に面しており、この寺院の位置が中之立町と両大手の距離を規定したことが推測される。

次に寺町の立地について考えると、図5に見るように、町の北側は城郭、東側は台地縁で、南側は木興池とかや池を結ぶ水路で分断されているため、それらの方角には町屋が無秩序に広がる可能性はない。しかし、西側は同じ台地上で城下建設後いち早く開発が進み、享保年間の絵図では農人街と呼ばれ町場

的景観を備えていた。また、愛宕大福寺の東のくわ町も遊廓を持つ町場になるが、この二つの町はどちらも年貢地扱いになっている。

ここでも今治と同じく、城→大手→寺社(愛宕神社・大福寺)という「秀吉モデル」が再現されていることに気づく。また、新設寺院で構成された寺町は、台地上の同一平面上の地子免地と地子地をわける機能を果たしていたことにも注目したい。

(4)「高虎モデル」の変容

津は高虎入部以前において、すでに、富田氏の居城として城下町経営がおこなわれていたが、当時の全体プランや規模については、不明であるといわねばならない⁴¹⁾。高虎の津城下の計画に関しては、藤田達生による研究がある⁴²⁾。氏は、高虎の時代に建設された津城下を復元し、「大坂包囲網」完成の一環としての諸城下の形成が、戦略的要請をこえ、結果として畿内近国地域に、商農分離にもとづく藩領規模の流通支配を確立させたことを明らかにされた。

しかし、いわゆる特権的商人の居住地とされる伊予町⁴³⁾が岩田川以南、いわば城下の縁辺に位置すること、津が32万石の城下町としては狭いことなどいくつかの疑問が残る。藤堂藩は徳川体制下において例外的に一藩二城

制が認められたが、本来伊賀上野は、藤堂家の本城である津に一元化されるはずであった。なぜならば、先述のとおり「津は平時の城」であり、豊臣家滅亡後、徳川による平和の時代の訪れとともに伊賀上野城は役目を終え、分散していた家臣と藩政機能は当然津に収束されると考えられるからである。

藤田氏は「上野城は未完の城郭」⁴⁴⁾と評され、その理由として大坂の陣が終結したためという見解を示された。だとすれば、「津も未完の城下町」であると解釈するべきである。なぜならば、大坂の陣の後、『宗国史』に描かれる高虎は、ほとんど領国に居住せず、戦後処理や日光東照宮の造営などで、外様でありながら徳川の常府のテクノクラートとして活躍する。その結果、当初のプランによる城下町の整備は進まず、二代高次の時代になって、伊賀上野と津の二元化が解消されないまま、津城下が改修されたとみるべきであろう。

IV. まとめにかえて

(1) 「高虎モデル」にみる「秀吉モデル」の影響

藤堂高虎の城下町今治・伊賀上野と「秀吉モデル」との関連を見るために図6を作成した。高虎ははじめて一円知行の国持大名になって今治を建設する。これは秀吉の長浜のように完全なタテ町型の城下町で、町割の基準となるのは、城下建設の時点での既存寺院である円浄寺であった。次の伊賀上野ではヨコ町型に転換するが、依然として町割の基準となるのは大福寺(愛宕神社)・西念寺の両既存寺院であった。これは明らかに、秀吉の手法である、「城郭」と「中世的先行基盤」の結合を受容したものに他ならない。そしてそのような理念のもとに設計された町は、明確な方向性をもったタテ町型のプランになる⁴⁵⁾。

しかも、城下町プランの基準として寺社の建造物をフィジカルに利用するということは、そのまま城下町自体がそれを信仰する城下の

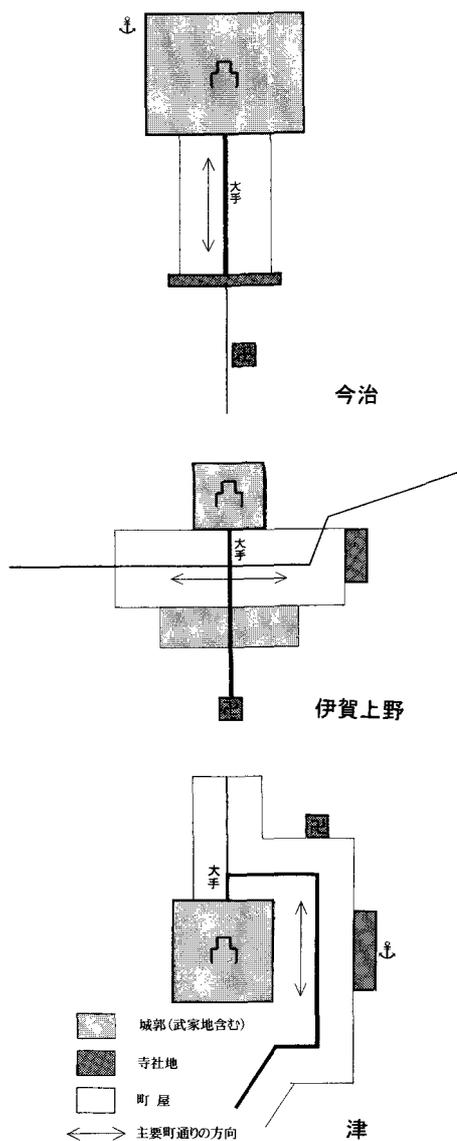


図6 高虎の城下モデル

町人や領民のメンタルな中心となり得ることを意味する。秀吉が長浜において、八幡宮を移転させてまで城下町プランに取り込んだのもやはり新領地における人心収攬という民政への配慮があったからだろう。また、城下町自体、権力誇示のための舞台装置である以上⁴⁶⁾、城→大手→寺社という、ヒエラルキーを具現化するタテ町型は建設者の意図をよりよ

く反映しているといえるだろう。

高虎の城下町においても、伊賀上野は、従来伊賀地方で盛んであった勝軍地蔵信仰⁴⁷⁾を城下町プランのなかに整合させていった事例であると評価できるだろう。また、勝軍地蔵にまつわる愛宕神社は家康と縁のふかい神社である。江戸・芝の愛宕神社は家康の將軍宣下を受けた慶長8年(1603)に造営されたものである。その由来は、本能寺の変(1582)のとき伊賀越えで領地へ帰ろうとした家康に、伊賀の土豪が勝軍地蔵仏を奉ったことにある⁴⁸⁾。

また、移転もふくむ新設寺院群である寺町を、城下の範囲を画定する手段として建設していることも重要であろう。高虎の場合それによって、地形的に連続する地子免地と年貢地をわける機能をもたせている。

さらに基本的に直交する直線街路で区画された斉整的な町割は、防御より流通経済重視という秀吉の考えを継承している。

と同時に、高虎は織豊期城下町プランとしての完成型である「秀吉モデル」から、次の段階に移行していることも見逃せない。それを端的に表わす例は、今治から伊賀上野の間に起こるタテ町型からヨコ町型への転換に求めたい。今治ではタテ町型のプランが採用されている理由として、高虎が関ヶ原の戦いの功により宇和島8万石から今治(伊予半国)20万石に加増され、一円知行の国持ち大名になったという事実に注目したい。自らの領国内に絶対的な首都機能を持つ城下町を建設するなら、長浜・大坂のようにタテ町型のプランになるのが当然かと思われる。

(2) 今後の課題

以上、秀吉と高虎の本城の城下町プランを中心に検討してきたが、高虎の初期プランの復元に関しては、同時代の絵図資料が残っていないため、寛永期以後の絵図と『宗国史』にみえる「高虎公代出来」の記述のある町名から推定することしかできなかつた。また

個々の城下町についても、紙幅の都合により十分な検討が加えられなかつた。

しかし、藤堂高虎が建設した一連の城下町では、伊賀上野においてタテ町型からヨコ町型への転換がみられるものの、基本的には秀吉によって確立された手法が継承されていることが確認できた。今後は、タテ町型からヨコ町型への変化の背後にあるものを探るとともに、高虎以外の織豊系大名の城下町プランについても、その系譜に注目しつつ検討する必要があるだろう。

そして、後の徳川体制下の天下普請において高虎が果たした役割⁴⁹⁾についても、さらに検討していくことを今後の課題として本稿の終わりとしたい。

(奈良女子大学・院)

〔付記〕

本稿は、平成9年度奈良女子大学へ提出した修士論文の一部を修正・加筆したものである。終始ご指導いただきました、同大学院人間文化研究科社会・地域学講座の先生方に御礼申し上げます。また、藤堂高虎関係の資料収集に際して、甲良町まちづくり課の野瀬喜久男課長をはじめとする、多くの方々にお世話になりましたことを記して感謝いたします。

なお、本稿の骨子は、1998年度人文地理学会大会(於：京都大学)において発表し、多くのご教示をいただきました。本稿の作成にあたり、有形・無形の様々なご協力を下さいました、私の周囲のすべての方々へ深く感謝を捧げます。本研究には奈良女子大学大学院人間文化研究科平成12年度RAプロジェクト「アジアにおける圏郭都市の景観変遷に関する比較地誌学的研究」の一部を使用しました。

〔注〕

- 1) 矢守一彦「五勺の酒」、地理8-11, 1962, 50~51頁。
- 2) 矢守一彦「城下町プランの変容過程」、『都市プランの研究』, 大明堂, 1970, 247~285頁。
- 3) 矢守一彦「城下町プランにおける〈近世〉」,

- (『講座日本の封建都市3』, 文一総合出版, 1981), 144~169頁。同『城下町のかたち』, 筑摩書房, 1988, 3~84頁。この他に, 縦町型・横町型の類型およびその変容を論じたものとして, 足利健亮『中近世都市の歴史地理』, 地人書房, 1984, 111~132頁, 221~230頁。宮本雅明「城下町の類型—縦町型から横町型へ—」(高橋康夫他編『図集日本都市史』, 東京大学出版会, 1993), 172~173頁。がある。本稿では, 城下町の全体プランを中心にして, 縦→横の変容過程の解明については稿を改めて論じたい。
- 4) 宮本雅明「城下町の空間類型」, 年報都市史研究4, 山川出版社, 1996, 3~15頁。
 - 5) 金井年「城下町プランの類型化—主に矢守類型についての若干の検討—」, 日本学報16, 1997, 31~45頁。
 - 6) 城下町の建設に際して, 防御という概念がどの程度意識されたかという問題については疑問が残る。拙稿「城下町における寺院配置—寺町の防御機能の再検討」, 人間文化研究科年報14, 1999, 193~206頁。足利健亮「信長公記にみる戦いの研究」, (国立歴史民俗学博物館監修, 『人類にとって戦いとは2 戦いのシステムと対外戦略』, 東洋書林, 1999), 161~185頁。
 - 7) 小島道裕「織豊期の都市法と都市遺構」, 国立歴史民俗博物館研究報告8, 1985, 251~293。同「戦国・織豊期の城下町」, (『日本都市史入門Ⅱ 町』, 東京大学出版会, 1990), 21~39頁。
 - 8) ①伊藤毅「近世都市と寺院」, (『日本の近世9 都市の時代』, 中央公論社, 1992), 81~128頁。また, 天正11年からの京都改造の際に, ②「中世都市と寺院」(『日本都市史入門Ⅰ 空間』, 東京大学出版会, 1989), 17~42頁。において指摘されたように, 「鴨川との関連から, 御土居の建設に困難が予想される東辺部分に寺院を集積させた」事例には, 寺院の土地開発技術力を利用する姿勢がみえる。
 - 9) 秀吉による伏見城下町建設, および天正期の京都改造に関しては, 本城ではない城下町の事例として, 本稿ではとりあげず別稿を用意している。
 - 10) 長浜市史編さん委員会『長浜市史2』, 1998, 275~304頁。
 - 11) 長浜市史編さん委員会『長浜市史3』, 1999, 138~141頁。
 - 12) 足利健亮「伏見城と城下町成立の意味—宇治川河道の延長と伏見大手筋の関係—」, 『中近世都市の歴史地理』, 地人書房, 1984, 111~132頁。
 - 13) 森岡栄一「長浜城下町の成立について」, 滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要6, 1988,
 - 14) 市立長浜城歴史博物館『羽柴秀吉と湖北・長浜』, 1988, 46頁。によると, 秀吉は主要寺社に対して所領安堵の文書を発給しているが, 城下建設に先立つものは, 総持寺(本能寺の変のおり, 秀吉の家族の避難所となった)と長浜八幡宮に宛てたもののみである。竹生島に発給されるのも, 同年の9月11日までかかっている。
 - 15) 前掲10), 361~367頁。
 - 16) 「田辺孝平氏文書」「下郷共済会文庫文書」, (中川泉三編『近江長浜町志1』, 臨川書店, 1989, 213~215頁。)
 - 17) 中部よし子「近世大坂の確立」(『講座日本の封建都市3』, 文一総合出版, 1981), 98~121頁。内田九州男「都市建設と町の開発」(『日本都市史入門Ⅱ 町』, 東京大学出版会, 1990), 41~58頁。
 - 18) 内田九州男「豊臣秀吉の大坂建設」(網野善彦・石井進・福田豊彦編『よみがえる中世2』, 平凡社, 1989), 43~68頁。
 - 19) 前掲8) ①。なお, 前掲17) 内田論文により, 平野町の東側で, 寺町が建設されなかった八丁目寺町以南にも建設計画があった可能性が指摘されている。
 - 20) 佐久間貴志「天下一の城下町」(網野善彦・石井進・福田豊彦編『よみがえる中世2』, 平凡社, 1989), 110~132頁。
 - 21) ①上野市古文献刊行会『宗国史 上』, 上野市, 1979。
②上野市古文献刊行会『宗国史 下』, 上野市, 1981。
 - 22) 上野市古文献刊行会『高山公実録—藤堂高虎伝』, 上野市, 1998。
 - 23) 吉田蒼生雄訳注『武功夜話1』, 新人物往来社, 1987, 384頁。御城普請方係として藤堂与右衛門の名がみえるが, 『宗国史』では, 高虎が秀長につかえるのは天正4年からとし

- ているので、年代があわない。しかし、高虎が長浜建設に際して何らかの役割を果たしたことは、想像に難くない。
- 24) 「秘府蔵書」前掲22), 54頁。
 - 25) 「本譜太祖公」前掲21) ①, 27頁。
 - 26) 「本譜太祖公」前掲21) ①, 34頁。
 - 27) 「本譜太祖公」前掲21) ①, 34頁。
 - 28) 木山六之丞は前掲21) ①の「功臣年表」にはあられない。
 - 29) 「本譜太祖公」前掲21) ①, 40頁。
 - 30) 今治郷土史編さん委員会『今治郷土史9 現代の今治』, 今治市, 1990, 1064頁。
 - 31) 「言行録」前掲22), 283頁。
 - 32) 「本譜太祖公」前掲21) ①, 49頁。
 - 33) 藤田達生「近世年の形成過程－伊賀上野を中心に－」, *Mie history vol.9*, 1998, 102～119頁。
 - 34) 「国約志」前掲21) ②, 365頁。
 - 35) 藤田元春「尺度綜考」(復刻版), 臨川書店, 1976, 353～354頁。1929年初出。
 - 36) 谷岡武雄監修, 福永正三著『秘蔵の国 伊賀路の歴史地理』, 地人書房, 1973, 256頁。
 - 37) 前掲21) ②所収, 555頁。
 - 38) 関西大学地理学教室実習調査報告書(20) 『三重県上野市の地理』, 1995, 2～4頁。1間＝6尺として, 本町は16～17間と22間を中心とする2階層の分布を示し, また二之町・三之町はほぼ20～21間の範囲に収束している。しかし, 『累世記事』では, 「本町は両類共に背裏式拾間, 二・三の枝町いずれも拾八間」とある。
 - 39) 菊岡如幻『茅栗草子』, 天和2年(上野図書館蔵)。
 - 40) 上野市『史跡上野城跡保存整備基本計画』, 1998, 72頁。
 - 41) 先行研究として, 津市役所『津市史 1』, 1959, 83～92頁。樋田清砂「安濃津城主考」, 1999, 三重県史研究15, 25～43頁。がある。
 - 42) 藤田達生「藤堂高虎の都市計画－伊勢津の場合－」, 研究代表者 菅原洋一: 『平成7年度～9年度科研報告書 伊勢街道文化に関する基礎的研究』, 1998, 77～91頁。
 - 43) 特権の商人の居住地は今治・伊賀上野ともに「本町」とよばれている。
 - 44) 前掲33)。
 - 45) 高虎が建設した城下における最も主要な町のタテ(今治)からヨコ(伊賀上野)およびタテの消滅型に相当する津への変化, もしくはその画期となった要因については稿をあらためて論じることとした。
 - 46) 小和田哲男『城と秀吉－戦う城から見せる城へ－』, 1996, 角川書店, 206頁。
 - 47) 森川桜男, 北出楯夫, 山田猛「伊賀の將軍塚」, *伊賀郷土史研究* 8, 1982, 54～96頁。
 - 48) 「東照宮御實紀巻6 慶長八年九月」, 『新訂増補国史大系 徳川實紀第一篇』, 1971, 吉川弘文館, 91～92頁。
 - 49) 千田嘉博「集大成としての江戸城」, 『織豊系城郭の形成』, 2000, 東京大学出版会, 152～175頁。氏は同論文の中で, 江戸城・駿府城・丹波篠山城・名古屋城の馬出しが織豊系城郭の発展を受け継いだものであると評価されているが, これらの城はいずれも天下普請によって建設されたもので, その縄張りにはすべて高虎が参加している。

Acceptance and Development of the Shokuhou Era Castle Town Plan in that of Toudoh Takatora

Kazuko NAKANISHI

This paper aims to study The Castle town plan in the *Shyokuhou* era. There is very little research that paid attention to the castle town planner in the research of the bygones. It is thought the group (the feudal lord group) or individual (the feudal lord) that had the same base to some degree, to trace the chronological order change of castle town plan itself and, if do the extraction of the basis plan

with the purpose that it is effective to make as the object of a research. And, the author selected the planner to meet these two conditions, ① some extent of period through plural castle town that constructed by a person, ② further more and those early period in structures inside of structure and taxation system like control organization to include restoration possible.

Making a case the castle town where step on about over in, this research and *Toyotomi Hideyoshi* and *Toudoh Takatora* built first of all, it extracts it about the one that root form and, that of the castle town plan in a *Shokuhou* era become the process and also the factor that achieve the change of the modern ages. Including it to the view point to the difference of the ground the free-land tax of the role and also the tradesman ground that the temple (the company) in the way, castle town plan of the feudal lord to the influence of the established from the middle age accomplished in the case, the author tried an approach.

Hideyoshi did the city management that comes the middle age when it is represented in the temple and used the that established power, actively. It has evident direction nature toward the Buddhist temple and Shinto shrine which the city where adopted a bygone days previous Buddhist temple and Shinto shrine into the plan like this is the symbol of the base of the middle age that is located in outside relation department. A kind of hierarchy which made the castle where is the center of a castle town there a peak is turned present. That the top in, decided the present world order that to bases that the residence structure made up self that is *Hideyoshi* and this idea is reflected best was a castle town the *Tatemachi* style.

The samurai living area and merchant part are characteristic to be separated clearly and be rich in the ability to make plans, in *Imabari* which is the first castle town where *Takatora* personally jogs substantially and observed completion. *Imabari* passes, *Honmachi* where *Hideyoshi* resembled in *Nagahama* where established in the top of the plan=it was the strong town of the character of the *Tatemachi* style balance where makes a major street a literal center.

Imabari, even Iga-Ueno which was the castle town where *Ieyasu* appoints to *Takatora* and caused built and it is same, (the *Atago shrine* and *Daihukuji temple*) and " *Hideyoshi* model" that say the castle→mainstreet→Buddhist temple and Shinto shrine are reproduced. Also, *Teramachi* where was composed of a few establishment temple had accomplished the function that divides the ground free-land tax the same plane on the plateau.